

# 関数解析学と選択公理

alg-d

<http://alg-d.com/math/ac/>

2013年10月26日

ZF では証明できない関数解析学の定理として Hahn-Banach の定理が有名である . Hahn-Banach の定理はある種の写像の延長の存在を保証する定理だが , 実は Hahn-Banach の定理に「延長に関する条件」を付け加えると , 選択公理と同値になることが知られている .

定義.  $V$  を実線型空間とする .

1.  $S \subset V$  が凸集合  
 $\iff$  任意の二点  $u, v \in S$  に対し  $\{tu + (1-t)v \mid t \in [0, 1]\} \subset S$
2.  $S \subset V$  を凸集合とする .  $x \in S$  が extreme point  
 $\iff$  任意の二点  $u, v \in S$  に対し  $x \notin \{tu + (1-t)v \mid t \in (0, 1)\}$
3.  $p: V \rightarrow \mathbb{R}$  が劣線型汎関数 (sublinear functional)  
 $\iff$  任意の  $v, w \in V$  と任意の実数  $\xi \geq 0$  に対し

$$p(v+w) \leq p(v) + p(w), \quad p(\xi v) = \xi p(v)$$

このとき  $p(0) = p(0v) = 0p(v) = 0$  であり ,

$$0 = p(0) = p(v + (-v)) \leq p(v) + p(-v)$$

だから  $-p(-v) \leq p(v)$  である .

定義.  $X$  を集合とし ,  $f, g: X \rightarrow \mathbb{R}$  を部分関数とする (定義域を  $\text{dom}$  で表す) .  $S \subset X$  を部分集合とするとき

$$f \leq_S g \iff S \subset \text{dom}(f) \cap \text{dom}(g) \text{ かつ任意の } x \in S \text{ に対し } f(x) \leq g(x)$$

$$f =_S g \iff S \subset \text{dom}(f) \cap \text{dom}(g) \text{ かつ任意の } x \in S \text{ に対し } f(x) = g(x)$$

と定義する .  $f =_S g \iff f \leq_S g$  かつ  $g \leq_S f$  である .

定義 .  $V$  を実線型空間 ,  $p, f: V \rightarrow \mathbb{R}$  を部分関数とする . 更に  $p$  は劣線型 ,  $f$  は線型で ,  $f \leq_{\text{dom}(f)} p$  を満たすとする . このとき

$$Z(p, f) := \{g: \text{dom}(p) \rightarrow \mathbb{R} : \text{線型汎関数} \mid g =_{\text{dom}(f)} f, g \leq_{\text{dom}(p)} p\}$$

と書く . 明らかに  $Z(p, f)$  は凸集合である .

命題 (Hahn-Banach の定理). 選択公理を仮定する .  $V$  を実線型空間 ,  $W \subset V$  を部分空間として ,  $p: V \rightarrow \mathbb{R}$  を劣線型汎関数とする .  $f: W \rightarrow \mathbb{R}$  を線型汎関数とし ,  $f \leq_W p$  を満たすとする . このとき  $Z(p, f) \neq \emptyset$  である .

証明 .  $A := \{\varphi: V \rightarrow \mathbb{R} : \text{部分線型汎関数} \mid W \subset \text{dom}(\varphi), \varphi \leq_{\text{dom}(\varphi)} p, \varphi =_W f\}$  と置き ,  $A$  に順序を包含関係  $\subset$  で定める .  $C \subset A$  を全順序部分集合とすると ,  $\varphi := \bigcup_{\psi \in C} \psi \in A$  は明らかに  $C$  の上界である . 故に  $(A, \subset)$  に Zorn の補題を適用できて , 極大元  $\varphi \in A$  を得る .  $\varphi$  の極大性により  $\text{dom}(\varphi) = V$  である . 故に  $\varphi \in Z(p, f)$  である . □

Hahn-Banach の定理の証明は選択公理よりも真に弱い BPI (=Boolean Prime Ideal theorem) があれば可能である .

### 定理 1. 選択公理

$\iff V$  を実線型空間 ,  $W \subset V$  を部分空間 ,  $S \subset V$  を部分集合とする .  $p: V \rightarrow \mathbb{R}$  を劣線型汎関数とし , 線型汎関数  $f: W \rightarrow \mathbb{R}$  は  $f \leq_W p$  を満たすとする . このとき前順序集合  $(Z(p, f), \leq_S)$  の極大元が存在する .

即ちある  $g \in Z(p, f)$  が存在して , 任意の  $h \in Z(p, f)$  に対し「 $g \leq_S h$  ならば  $g =_S h$ 」が成り立つ .

証明 . ( $\implies$ ) Hahn-Banach の定理により  $Z(p, f) \neq \emptyset$  であるから ,  $S \subset W$  のときは明らか .  $S \not\subset W$  とする .  $\widetilde{W} \subset V$  を  $W$  と  $S$  で生成される部分空間とする .

$$A := \left\{ (M, \varphi) \mid \begin{array}{l} W \subset M \subset \widetilde{W} \text{ は部分空間} \\ M \text{ は } W \text{ と } M \cap S \text{ で生成される} \\ \varphi \text{ は } (Z(p|_M, f), \leq_{M \cap S}) \text{ の極大元} \end{array} \right\}$$

に順序関係  $\leq$  を

$$(M, \varphi) \leq (N, \psi) \iff M \subset N, \varphi =_M \psi$$

で定める .  $\mathcal{C} \subset \mathcal{A}$  を全順序部分集合とする .  $\varphi := \bigcup_{(N, \psi) \in \mathcal{C}} \psi$ ,  $M := \text{dom}(\varphi)$  と定める . 明らかに  $\varphi \in Z(p|_M, f)$  である .  $g \in Z(p|_M, f)$  が  $\varphi \leq_{M \cap S} g$  を満たすとする . 任意の  $s \in M \cap S$  を取る .  $M$  の定義よりある  $(N, \psi) \in \mathcal{C}$  が存在して  $s \in N$  となる .  $(N, \psi) \in \mathcal{C} \subset \mathcal{A}$  だから ,  $\psi$  は  $(Z(p|_N, f), \leq_{N \cap S})$  の極大元 .  $g|_N \in Z(p|_N, f)$ ,  $\psi \leq_{N \cap S} g|_N$  だから ,  $\psi$  の極大性により  $\psi(s) = g(s)$  である . 即ち  $\varphi(s) = g(s)$  , 従って  $\varphi =_{M \cap S} g$  が分かり ,  $\varphi \in Z(p|_M, f)$  は極大元である . 故に  $(M, \varphi) \in \mathcal{A}$  . よって明らかに  $(M, \varphi)$  は  $\mathcal{C}$  の上界である . そこで  $(\mathcal{A}, \leq)$  に Zorn の補題を適用して極大元  $(M, \varphi) \in \mathcal{A}$  を得る . 極大性より  $M = \widetilde{W}$  である . このとき Hahn-Banach の定理により  $g \in Z(p, \varphi) \subset Z(p, f)$  を取れば , この  $g$  が  $(Z(p, f), \leq_S)$  の極大元である .

( $\Leftarrow$ ) 選択公理と同値な AMC を示す .

AMC (= the Axiom of Multiple Choice) とは次の命題のこと .

非空集合の族  $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$  に対し , 有限集合の族  $\{F_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$  で  
任意の  $\lambda \in \Lambda$  に対し  $\emptyset \neq F_\lambda \subset X_\lambda$  となるものが存在する .

同値性の証明は the Axiom of Multiple Choice を参照 .

$\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$  を互いに素な非空集合の族とする .  $X := \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$  として

$$V := \{\varphi \in \mathbb{R}^X \mid \text{有限個の } \lambda \in \Lambda \text{ を除いて } \varphi(X_\lambda) = 0\}$$

と定める .  $V$  は実線型空間である .  $A \subset X$  に対し  $\chi_A$  で  $A$  の特性関数を表す . 即ち

$$\chi_A(x) := \begin{cases} 1 & (x \in A \text{ のとき}) \\ 0 & (x \notin A \text{ のとき}) \end{cases} .$$

特に  $x \in X$  に対し  $\chi_x := \chi_{\{x\}}$  と書く .  $S := \{\chi_x \mid x \in X\} \subset V$ ,  $S_\lambda := \{\chi_x \mid x \in X_\lambda\} \subset V$  と定める .  $v \in V$  に対し ,  $v^+(x) := \max\{v(x), 0\}$  と定義して

$$p(v) := \sum_{\lambda \in \Lambda} \sup_{x \in X_\lambda} v^+(x)$$

と定めると  $p : V \rightarrow \mathbb{R}$  は劣線型汎関数である .  $f := 0 : 0 \rightarrow \mathbb{R}$  を線型汎関数として , 仮定を適用し極大元  $g \in (Z(p, f), \leq_S)$  を得る . このとき

$$\rho_\lambda := \frac{1}{2} \sup_{x \in X_\lambda} g(\chi_x)$$

$$F_\lambda := \{x \in X_\lambda \mid g(\chi_x) > \rho_\lambda\}$$

と定める .

$\lambda \in \Lambda$  を取り  $F_\lambda = \emptyset$  と仮定する .  $g =_{S_\lambda} 0$  である .

$\therefore \rho_\lambda > 0$  と仮定すると ,  $\sup$  の性質によりある  $x \in X_\lambda$  が存在して  $g(\chi_x) > \rho_\lambda$  である . 故に  $F_\lambda = \emptyset$  に矛盾する . 従って  $\rho_\lambda \leq 0$  となる . 即ち  $g \leq_{S_\lambda} 0$  である .  $p$  の定義より明らかに  $0 \leq_V p$  , 故に  $0 \in Z(p, f)$  である . よって  $g$  の極大性により  $g =_{S_\lambda} 0$  である .

$a \in X_\lambda$  を一つ取り ,  $h: V \rightarrow \mathbb{R}$  を  $h(v) := g((1 - \chi_{X_\lambda})v) + v(a)$  で定める . 簡単のため  $\chi = \chi_{X_\lambda}$  と書くと ,  $p$  の定義により

$$p(v) = p((1 - \chi)v) + p(\chi v) \geq g((1 - \chi)v) + v^+(a) \geq h(v)$$

だから  $h \in Z(p, f)$  である . しかし  $x \in X$  に対し

$$h(\chi_x) = \begin{cases} \chi_x(a) & (x \in X_\lambda \text{ のとき}) \\ g(\chi_x) & (x \notin X_\lambda \text{ のとき}) \end{cases} = \begin{cases} 1 & (x = a \text{ のとき}) \\ 0 & (x \neq a \text{ のとき}) \end{cases}$$

であるから  $g \leq_S h$  かつ  $g \neq_S h$  となり ,  $g$  の極大性に矛盾する .

故に  $F_\lambda \neq \emptyset$  である . また  $\rho > 0$  である .

$|F_\lambda| = \infty$  と仮定する . 自然数  $n$  を  $n\rho > 1$  となるように決める . このとき  $F_\lambda$  から互いに異なる  $n$  個の元  $a_1, \dots, a_n \in F_\lambda$  が取れる . すると

$$1 = p(\chi_{\{a_1, \dots, a_n\}}) \geq g(\chi_{\{a_1, \dots, a_n\}}) = g(\chi_{a_1}) + \dots + g(\chi_{a_n}) \geq n\rho > 1$$

となり矛盾する . 故に  $|F_\lambda| < \infty$  となる .

以上より AMC が示された . □

**定理 2.** 以下の命題は (ZF 上) 同値

1. 選択公理
2.  $V$  を実線型空間 ,  $W \subset V$  を部分空間として ,  $p: V \rightarrow \mathbb{R}$  を劣線型汎関数とする .  $f: W \rightarrow \mathbb{R}$  を線型汎関数とし ,  $f \leq_W p$  を満たすとする . このとき  $Z(p, f)$  は extreme point を持つ .
3. 「実ノルム空間の双対空間」の単位球体は extreme point を持つ .

証明. (1  $\implies$  2) 整列可能定理を使って  $V \setminus W$  を整列し , 順序数  $\lambda$  を使って  $V \setminus W = \{v_\alpha \mid \alpha < \lambda\}$  と書く .  $\alpha < \lambda$  に対し  $(q_\alpha, K_\alpha, p_\alpha)$  を以下の性質を満たすように超限帰納法で定義する .

(a)  $p_\alpha, q_\alpha: V \rightarrow \mathbb{R}$  は劣線型汎関数である .

(b)  $f \leq_W p_\alpha$

(c)  $p_\alpha(v) \geq -p_0(-v)$

(d)  $\beta < \alpha$  のとき  $p_\beta \geq_V p_\alpha$

(e)  $K_\alpha = Z(p_\alpha, f)$

(i)  $\alpha = 0$  のとき .

$$q_0 := p$$

$$K_0 := \{g \in Z(q_0, f) \mid g \text{ は } (Z(q_0, f), \leq_{\{v_0\}}) \text{ の極大元} \}$$

$$p_0(v) := \sup_{g \in K_0} g(v) \quad (v \in V)$$

と定める . この定義が可能なこと , またこれらが性質 (a) から (e) を満たすことを確認する .  $q_0$  が劣線型であることは良い . 勿論  $f \leq_W q_0$  である . 故に定理 1 により  $K_0 \neq \emptyset$  である .  $g \in K_0 (\subset Z(q_0, f))$  のとき  $g \leq_V q_0$  だから , 各  $v \in V$  について  $\{g(v) \mid g \in K_0\}$  は上に有界である . 故に  $p_0(v) = \sup_{g \in K_0} g(v)$  は定義され , 特に  $p_0 \leq_V q_0$  となる .  $p_0, K_0$  の定義から明らかに ,

$$\text{任意の } g \in K_0 \text{ に対し } g(v_0) = p_0(v_0) \quad (*)$$

となる . また , 任意の  $v, w \in V$  と実数  $\xi \geq 0$  に対し

$$\begin{aligned} p_0(v+w) &= \sup_{g \in K_0} g(v+w) = \sup_{g \in K_0} (g(v) + g(w)) \\ &\leq \sup_{g \in K_0} g(v) + \sup_{g \in K_0} g(w) \\ &= p_0(v) + p_0(w) \\ p_0(\xi v) &= \sup_{g \in K_0} g(\xi v) = \sup_{g \in K_0} \xi g(v) \\ &= \xi p_0(v) \end{aligned}$$

だから ,  $p_0: V \rightarrow \mathbb{R}$  は劣線型汎関数である . 故に (c)  $p_0(v) \geq -p_0(-v)$  が成り立つ . また  $p_0$  の定義より  $f \leq_W p_0$  だから  $Z(p_0, f)$  を考えることができる . このとき (e)  $K_0 = Z(p_0, f)$  が分かる .

∴)  $p_0$  の定義より , 任意の  $g \in K_0$  に対し  $g \leq_V p_0$  だから ,  $K_0 \subset Z(p_0, f)$  は明らか . 逆を示すため ,  $g \in Z(p_0, f)$  を取る .  $p_0 \leq_V q_0$  だったから  $g \in Z(q_0, f)$  である . また (\*) 「任意の  $g \in K_0$  に対し  $g(v_0) = p_0(v_0)$ 」 に気をつけると

$$-p_0(-v_0) = -\sup_{h \in K_0} h(-v_0) = \inf_{h \in K_0} h(v_0) = \inf_{h \in K_0} p_0(v_0) = p_0(v_0).$$

$g \leq_V p_0$  だから  $g(v_0) \leq p_0(v_0)$  であり, かつ

$$g(v_0) = -g(-v_0) \geq -p_0(-v_0) = p_0(v_0).$$

故に  $g(v_0) = p_0(v_0)$  となる. よって  $g \in K_0$  が分かる.

以上より  $\alpha = 0$  の時は (a) から (e) が成り立つことが分かった.

(ii)  $0 < \alpha < \lambda$  のとき.

$$q_\alpha(v) := \inf_{\beta < \alpha} p_\beta(v) \quad (v \in V)$$

$$K_\alpha := \{g \in Z(q_\alpha, f) \mid g \text{ は } (Z(q_\alpha, f), \leq_{\{v_\alpha\}}) \text{ の極大元} \}$$

$$p_\alpha(v) := \sup_{g \in K_\alpha} g(v) \quad (v \in V)$$

と置く. この定義が可能なこと, またこれらが性質 (a) から (e) を満たすことを確認する. 帰納法の仮定 (c) より  $\beta < \alpha$  に対し  $p_\beta(v) \geq -p_0(-v)$  だから,  $\{p_\beta(v) \mid \beta < \alpha\}$  は下に有界である. 故に  $q_\alpha(v) = \inf_{\beta < \alpha} p_\beta(v)$  は定義される. 任意の  $v, w \in V$  と実数  $\xi \geq 0$  に対し

$$\begin{aligned} q_\alpha(v+w) &= \inf_{\beta < \alpha} p_\beta(v+w) \\ &\leq \inf_{\beta < \alpha} (p_\beta(v) + p_\beta(w)) \quad (\text{帰納法の仮定 (a) による}) \\ &= \inf_{\beta < \alpha} p_\beta(v) + \inf_{\beta < \alpha} p_\beta(w) \quad (\text{帰納法の仮定 (d) による}) \\ &= q_\alpha(v) + q_\alpha(w). \\ q_\alpha(\xi v) &= \inf_{\beta < \alpha} p_\beta(\xi v) = \inf_{\beta < \alpha} \xi p_\beta(v) \quad (\text{帰納法の仮定 (a) による}) \\ &= \xi q_\alpha(v). \end{aligned}$$

即ち  $q_\alpha: V \rightarrow \mathbb{R}$  は劣線型汎関数である. 帰納法の仮定 (b) により  $q_\alpha(v) = \inf_{\beta < \alpha} p_\beta(v) \geq f(v)$  だから  $f \leq_W q_\alpha$  である. 故に定理 1 により  $K_\alpha \neq \emptyset$  である.  $g \in K_\alpha (\subset Z(q_\alpha, f))$  のとき  $g \leq q_\alpha$  だから,  $\{g(v) \mid g \in K_\alpha\}$  は上に有界である. よって  $p_\alpha(v) = \sup_{g \in K_\alpha} g(v)$  は定義され, 特に  $p_\alpha \leq_V q_\alpha$  である. 従って  $\beta < \alpha$  に対し  $p_\alpha(v) \leq q_\alpha(v) = \inf_{\beta < \alpha} p_\beta(v) \leq p_\beta(v)$ , 即ち (d) が成り立つ. 特に  $p_\alpha(-v) \leq p_0(-v)$  であるから,  $p_\alpha(v) \geq -p_\alpha(-v) \geq -p_0(-v)$ , 即ち (c) が成り立つ.  $p_\alpha, K_\alpha$  の定義から明らかに

$$\text{任意の } g \in K_\alpha \text{ に対し } g(v_\alpha) = p_\alpha(v_\alpha) \quad (**)$$

となる．また，任意の  $v, w \in V$  と実数  $\xi \geq 0$  に対し

$$\begin{aligned} p_\alpha(v+w) &= \sup_{g \in K_\alpha} g(v+w) \\ &= \sup_{g \in K_\alpha} (g(v) + g(w)) \\ &\leq \sup_{g \in K_\alpha} g(v) + \sup_{g \in K_\alpha} g(w) \\ &= p_\alpha(v) + p_\alpha(w). \\ p_\alpha(\xi v) &= \sup_{g \in K_\alpha} g(\xi v) = \sup_{g \in K_\alpha} \xi g(v) \\ &= \xi p_\alpha(v). \end{aligned}$$

従って  $p_\alpha: V \rightarrow \mathbb{R}$  は劣線型汎関数である．また  $p_\alpha$  の定義より  $f \leq_W p_\alpha$  だから  $Z(p_\alpha, f)$  を考えることができる．このとき (e)  $K_\alpha = Z(p_\alpha, f)$  が成り立つ．

∴)  $p_\alpha$  の定義より，任意の  $g \in K_\alpha$  に対し  $g \leq_V p_\alpha$  だから， $K_\alpha \subset Z(p_\alpha, f)$  は明らか．逆を示すため， $g \in Z(p_\alpha, f)$  を取る． $p_\alpha \leq_V q_\alpha$  だったから  $g \in Z(q_\alpha, f)$  である．また (\*\*) 「任意の  $g \in K_\alpha$  に対し  $g(v_\alpha) = p_\alpha(v_\alpha)$ 」に気をつけると

$$-p_\alpha(-v_\alpha) = -\sup_{h \in K_\alpha} h(-v_\alpha) = \inf_{h \in K_\alpha} h(v_\alpha) = \inf_{h \in K_\alpha} p_\alpha(v_\alpha) = p_\alpha(v_\alpha).$$

$g \leq_V p_\alpha$  だったから  $g(v_\alpha) \leq p_\alpha(v_\alpha)$  であり，かつ

$$g(v_\alpha) = -g(-v_\alpha) \geq -p_\alpha(-v_\alpha) = p_\alpha(v_\alpha).$$

故に  $g(v_\alpha) = p_\alpha(v_\alpha)$  でなければならない．よって  $g \in K_\alpha$  が分かる．

以上により (a) から (e) が成り立つことが分かった．

さて， $v \in V$  に対し  $q_\lambda(v) := \inf_{\alpha < \lambda} p_\alpha(v)$  と定める．明らかに， $\alpha < \lambda$  に対し  $p_\alpha \geq_V p_\lambda$  である．性質 (b) により  $f \leq_W q_\lambda$  であるから，Hahn-Banach の定理により  $Z(q_\lambda, f) \neq \emptyset$  である． $0 < \alpha \leq \lambda$  とする．このとき  $Z(q_\alpha, f) = \bigcap_{\beta < \alpha} K_\beta$  となる．

∴) 任意の  $\beta < \alpha$  を取ると，定義より  $q_\alpha \leq_V p_\beta$  だから  $Z(q_\alpha, f) \subset Z(p_\beta, f) = K_\beta$ ．故に  $Z(q_\alpha, f) \subset \bigcap_{\beta < \alpha} K_\beta$  である．

逆に  $g \in \bigcap_{\beta < \alpha} K_\beta$  とする．任意の  $\beta < \alpha$  に対し  $g \in K_\beta = Z(p_\beta, f)$  だから  $g \leq_V p_\beta$  である．よって  $g(v) \leq \inf_{\beta < \alpha} p_\beta(v) = q_\alpha(v)$  となり， $g \in Z(q_\alpha, f)$  である．

$\varphi, \psi \in Z(q_\lambda, f)$  とする .  $\alpha < \lambda$  とすると  $\varphi, \psi \in K_\alpha$  だから  $\varphi(v_\alpha) = p_\alpha(v_\alpha) = \psi(v_\alpha)$  である . 故に  $\varphi =_V \psi$  である . 即ち  $Z(q_\lambda, f) = \{\varphi\}$  と書ける . この  $\varphi$  が extreme point である .

∴) ある  $g, h \in Z(p, f)$ ,  $g, h \neq \varphi$  と  $0 < t < 1$  を使って  $\varphi = tg + (1-t)h$  と書けたと仮定する .  $\Gamma := \{\alpha < \lambda \mid g \notin K_\alpha \text{ または } h \notin K_\alpha\}$  と置く . 「全ての  $\alpha < \lambda$  について  $g \in K_\alpha$ 」だとすると  $\varphi = g$  となるから ,  $\Gamma \neq \emptyset$  である . そこで  $\gamma := \min \Gamma$  が定まる .  $\varphi \in K_0$  だから  $p_0(v_0) = \varphi(v_0) = tg(v_0) + (1-t)h(v_0)$  となる .  $g(v_0), h(v_0) \leq p_0(v_0)$  であるから ,  $g(v_0) = h(v_0) = p_0(v_0)$  でなければならない . 故に  $g, h \in K_0$  だから ,  $\gamma > 0$  である .  $g, h \in \bigcap_{\alpha < \gamma} K_\alpha = Z(q_\gamma, f)$  だから  $g, h \leq q_\gamma$  となる . 「 $g \notin K_\gamma$  または  $h \notin K_\gamma$ 」だから , 「 $g(v_\gamma) < p_\gamma(v_\gamma)$  または  $h(v_\gamma) < p_\gamma(v_\gamma)$ 」である . どちらにしても  $\varphi(v_\gamma) = tg(v_\gamma) + (1-t)h(v_\gamma) < p_\gamma(v_\gamma)$  となり ,  $\varphi \in K_\gamma$  に矛盾する .

(2  $\implies$  3)  $(V, \|\cdot\|_V)$  を実ノルム空間とする .  $\|\cdot\|_V: V \rightarrow \mathbb{R}$  は劣線型写像である . そこで  $W := 0, f := 0: 0 \rightarrow \mathbb{R}$  として仮定 2 を使えば  $Z(\|\cdot\|_V, f) \subset V^*$  は extreme point を持つ .  $S \subset V^*$  を単位球体とする . 即ち  $S := \{g \in V^* \mid \|g\|_{V^*} \leq 1\}$  であるが ,  $\|g\|_{V^*} \leq 1 \iff |g(\cdot)| \leq_V \|\cdot\|_V$  である . 故に  $Z(\|\cdot\|_V, f) = S$  となり ,  $S$  は extreme point を持つ .

(3  $\implies$  1)  $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$  を非空集合の族とする .  $X_\lambda$  は互いに素としてよい .  $X := \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$  として

$$V := \left\{ f \in \mathbb{R}^X \mid \begin{array}{l} \text{任意の } \varepsilon > 0 \text{ に対し } \{x \in X \mid |f(x)| > \varepsilon\} \text{ は有限集合,} \\ \sum_{\lambda \in \Lambda} \left( \sup_{x \in X_\lambda} |f(x)| \right) < \infty \end{array} \right\}$$

$$W := \left\{ g \in \mathbb{R}^X \mid \sup_{\lambda \in \Lambda} \left( \sum_{x \in X_\lambda} |g(x)| \right) < \infty \right\}$$

と定める . これらは次のノルムでノルム空間になる .

$$\|f\|_V := \sum_{\lambda \in \Lambda} \left( \sup_{x \in X_\lambda} |f(x)| \right)$$

$$\|g\|_W := \sup_{\lambda \in \Lambda} \left( \sum_{x \in X_\lambda} |g(x)| \right)$$

$S := \{g \in W \mid \|g\|_W \leq 1\} \subset W$  を単位球体とする .  $V^* := \{\xi: V \rightarrow \mathbb{R} : \text{有界線型}\}$  を  $V$  の双対空間とすると , 後で述べる補題 1 により等長同型  $W \cong V^*$  が成り立つ . これにより  $S$  を  $V^*$  内の単位球体とみなす . 仮定より  $S$  は extreme point  $e \in S$  を持つ . 任意の  $\lambda \in \Lambda$  を取る .  $e(x) \neq 0$  となる  $x \in X_\lambda$  が一意に存在する .



∴) まず存在を示す．その為に，全ての  $x \in X_\lambda$  について  $e(x) = 0$  であると仮定する． $u \in X_\lambda$  を一つ取り， $x \in X$  に対し

$$f(x) := \begin{cases} 1 & (x = u \text{ のとき}) \\ e(x) & (x \neq u \text{ のとき}) \end{cases}, \quad g(x) := \begin{cases} -1 & (x = u \text{ のとき}) \\ e(x) & (x \neq u \text{ のとき}) \end{cases}$$

と定めると  $f, g \in S$  であり，これらは  $f \neq e, g \neq e, e = \frac{f+g}{2}$  を満たす．即ち  $e$  が extreme point であることに矛盾する．故に  $e(x) \neq 0$  となる  $x \in X_\lambda$  は存在する．

次に一意性を示す．その為に， $u, v \in X_\lambda, u \neq v$  が  $e(u), e(v) \neq 0$  を満たすと仮定する．

$$f(x) := \begin{cases} e(u)(1 + |e(v)|) & (x = u \text{ のとき}) \\ e(v)(1 - |e(u)|) & (x = v \text{ のとき}) \\ e(x) & (x \neq u, v \text{ のとき}) \end{cases}$$

$$g(x) := \begin{cases} e(u)(1 - |e(v)|) & (x = u \text{ のとき}) \\ e(v)(1 + |e(u)|) & (x = v \text{ のとき}) \\ e(x) & (x \neq u, v \text{ のとき}) \end{cases}$$

と定めると  $f, g \in S$  であり，これらは  $f \neq e, g \neq e, e = \frac{f+g}{2}$  を満たす．即ち  $e$  が extreme point であることに矛盾する．故に  $e(x) \neq 0$  となる  $x \in X_\lambda$  は一意的である．

そこで  $F: \Lambda \rightarrow X = \bigcup X_\lambda$  を  $F(\lambda) := (e(x) \neq 0 \text{ となる } x \in X_\lambda)$  で定めれば  $F$  が選択関数となる． □

さて，関数解析において次のような定理がある．

命題 (Banach-Alaoglu の定理). ノルム空間  $X$  の双対空間  $X^*$  の閉単位球体  $B \subset X^*$  は弱\*位相でコンパクトである．

命題 (Krein-Milman の定理). 局所凸位相線型空間のコンパクト凸集合は extreme point を持つ．

定理 3. 選択公理  $\iff$  Banach-Alaoglu の定理 + Krein-Milman の定理

証明. ( $\implies$ ) 略

( $\impliedby$ ) 定理 2 の条件 3 を示す． $X$  を実ノルム空間とする． $X^*$  は局所凸位相線型空間で，単位球体  $B \subset X^*$  は凸集合である．Banach-Alaoglu により  $B \subset X^*$  はコンパクト

である．故に Klein-Milman の定理により  $B$  は extreme point を持つ．

□

補題 1. 等長同型  $W \cong V^*$  が成り立つ．

証明.  $f \in V, g \in W$  に対し

$$\begin{aligned} \sum_{\lambda \in \Lambda} \left( \sum_{x \in X_\lambda} |g(x)| |f(x)| \right) &\leq \sum_{\lambda \in \Lambda} \left( \left( \sup_{y \in X_\lambda} |f(y)| \right) \sum_{x \in X_\lambda} |g(x)| \right) \\ &\leq \left( \sup_{\lambda \in \Lambda} \sum_{x \in X_\lambda} |g(x)| \right) \left( \sum_{\lambda \in \Lambda} \sup_{y \in X_\lambda} |f(y)| \right) \\ &\leq \|g\|_W \|f\|_V \end{aligned}$$

故に  $\sum_{\lambda \in \Lambda} \sum_{x \in X_\lambda} g(x)f(x)$  は絶対収束する．そこで

$$\varphi(g)(f) := \sum_{\lambda \in \Lambda} \sum_{x \in X_\lambda} g(x)f(x)$$

と定義する． $\varphi(g) : f \mapsto \varphi(g)(f)$  は  $V^*$  の元である．故に線型写像  $\varphi : W \rightarrow V^*$  が得られる．また  $\|\varphi(g)\|_{V^*} \leq \|g\|_W$  も分かる．

任意の  $\varepsilon > 0$  を取る． $\|g\|_W$  の定義と  $\sup$  の性質により，ある  $\mu \in \Lambda$  が存在して  $\sum_{x \in X_\mu} |g(x)| > \|g\|_W - \frac{\varepsilon}{2}$  となる．更に，ある有限部分集合  $A \subset X_\mu$  が存在して  $\sum_{x \in A} |g(x)| > \sum_{x \in X_\mu} |g(x)| - \frac{\varepsilon}{2}$  とできる．そこで  $h \in V$  を

$$h(x) := \begin{cases} 1 & (x \in A \text{ かつ } g(x) > 0 \text{ のとき}) \\ -1 & (x \in A \text{ かつ } g(x) < 0 \text{ のとき}) \\ 0 & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

で定義すれば  $\|h\|_V = 1$  であり，

$$\begin{aligned} \|\varphi(g)\|_{V^*} &= \sup_{0 \neq f \in V} \frac{|\varphi(g)(f)|}{\|f\|_V} \\ &\geq \frac{|\varphi(g)(h)|}{\|h\|_V} \\ &= \sum_{x \in A} |g(x)| \\ &> \|g\|_W - \varepsilon. \end{aligned}$$

故に  $\|\varphi(g)\|_{V^*} > \|g\|_W - \varepsilon$  となる． $\varepsilon > 0$  は任意だったから， $\|\varphi(g)\|_{V^*} \geq \|g\|_W$  が分かる．即ち  $\|\varphi(g)\|_{V^*} = \|g\|_W$  であり， $\varphi$  は等長写像である．

任意の  $\xi \in V^*$  を取る .  $x \in X$  に対し  $\chi_x := \chi_{\{x\}} \in V$  を特性関数として  $g_\xi(x) := \xi(\chi_x)$  と置く .  $g_\xi \in W$  である .

$\therefore g_\xi \notin W$  と仮定する .  $g_\xi \in \mathbb{R}^X$  だから

$$\sup_{\lambda \in \Lambda} \left( \sum_{x \in X_\lambda} |g(x)| \right) = \infty$$

でなければならない . つまりある  $\mu \in \Lambda$  が存在して  $\sum_{x \in X_\mu} |g(x)| > \|\xi\|_{V^*} + 1$  となる . 更に , ある有限部分集合  $A \subset X_\mu$  が存在して  $\sum_{x \in A} |g(x)| > \|\xi\|_{V^*}$  とできる .  
そこで  $h \in V$  を

$$h(x) := \begin{cases} 1 & (x \in A \text{ かつ } g(x) > 0 \text{ のとき}) \\ -1 & (x \in A \text{ かつ } g(x) < 0 \text{ のとき}) \\ 0 & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

で定義すれば  $\|h\|_V = 1$  であり ,

$$|\xi(h)| = \left| \xi \left( \sum_{x \in A} h(x) \chi_x \right) \right| = \left| \sum_{x \in A} h(x) \xi(\chi_x) \right| = \sum_{x \in A} |g_\xi(x)| > \|\xi\|_{V^*} .$$

故に

$$\|\xi\|_{V^*} = \sup_{0 \neq f \in V} \frac{|\xi(f)|}{\|f\|_V} \geq \frac{|\xi(h)|}{\|h\|_V} > \|\xi\|_{V^*}$$

となり矛盾する .

任意の  $f_0 \in V$  を取る .

任意の  $\varepsilon > 0$  を取ると ,  $\varphi(g), \xi \in V^*$  は有界 , 即ち連続だから , ある  $\delta > 0$  が存在して  
任意の  $f \in V$  に対し

$$\|f - f_0\|_V < \delta \implies |\varphi(g)(f) - \varphi(g)(f_0)| < \frac{\varepsilon}{2}, |\xi(f) - \xi(f_0)| < \frac{\varepsilon}{2} .$$

(i)  $n := |\{\lambda \in \Lambda \mid \exists x \in X_\lambda (f_0(x) \neq 0)\}| < \infty$  のとき .

$\{\lambda \in \Lambda \mid \exists x \in X_\lambda (f_0(x) \neq 0)\} = \{\lambda_1, \dots, \lambda_n\}$  と書く .  $V$  の定義より  $A := \{x \in X \mid |f(x)| \geq \frac{\delta}{n}\}$  は有限集合となる . そこで  $f \in V$  として

$$f(x) := \begin{cases} f_0(x) & (x \in A \text{ のとき}) \\ 0 & (x \notin A \text{ のとき}) \end{cases}$$

を取れば

$$\begin{aligned}\|f - f_0\|_V &= \sum_{\lambda \in \Lambda} \left( \sup_{x \in X_\lambda} |f(x) - f_0(x)| \right) \\ &= \sum_{i=1}^n \left( \sup_{x \in X_{\lambda_i} \setminus A} |f_0(x)| \right) \\ &< \sum_{i=1}^n \frac{\delta}{n} = \delta.\end{aligned}$$

更に

$$\begin{aligned}\varphi(g_\xi)(f) &= \sum_{\lambda \in \Lambda} \sum_{x \in X_\lambda} g_\xi(x) f(x) = \sum_{x \in A} g_\xi(x) f(x) = \sum_{x \in A} \xi(\chi_x) f(x) \\ &= \xi \left( \sum_{x \in A} f(x) \chi_x \right) = \xi(f)\end{aligned}$$

故に

$$\begin{aligned}|\varphi(g_\xi)(f_0) - \xi(f_0)| &\leq |\varphi(g_\xi)(f_0) - \varphi(g_\xi)(f)| + |\xi(f) - \xi(f_0)| \\ &< \frac{\varepsilon}{2} + \frac{\varepsilon}{2} = \varepsilon.\end{aligned}$$

(ii)  $|\{\lambda \in \Lambda \mid \exists x \in X_\lambda (f_0(x) \neq 0)\}| = \infty$  のとき .

$\|f_0\|_V = \sum_{\lambda \in \Lambda} \left( \sup_{x \in X_\lambda} |f_0(x)| \right)$  だから , ある有限部分集合  $\Lambda_1 \subset \Lambda$  が存在して

$$\sum_{\lambda \in \Lambda_1} \left( \sup_{x \in X_\lambda} |f_0(x)| \right) > \|f_0\|_V - \frac{\delta}{2}$$

となる . このとき  $\Lambda_2 := \Lambda \setminus \Lambda_1$  と置けば

$$\sum_{\lambda \in \Lambda_2} \left( \sup_{x \in X_\lambda} |f_0(x)| \right) < \frac{\delta}{2}.$$

$n := |\Lambda_1|$  として  $\Lambda_1 = \{\lambda_1, \dots, \lambda_n\}$  と書く .  $V$  の定義より  $A := \{x \in X_{\lambda_1} \cup \dots \cup X_{\lambda_n} \mid |f(x)| \geq \frac{\delta}{2n}\}$  は有限集合となる . そこで  $f \in V$  として

$$f(x) := \begin{cases} f_0(x) & (x \in A \text{ のとき}) \\ 0 & (x \notin A \text{ のとき}) \end{cases}$$

を取れば

$$\begin{aligned}\|f - f_0\|_V &= \sum_{\lambda \in \Lambda} \left( \sup_{x \in X_\lambda} |f(x) - f_0(x)| \right) \\ &= \sum_{\lambda \in \Lambda_1} \left( \sup_{x \in X_\lambda} |f(x) - f_0(x)| \right) + \sum_{\lambda \in \Lambda_2} \left( \sup_{x \in X_\lambda} |f(x) - f_0(x)| \right) \\ &= \sum_{\lambda \in \Lambda_1} \left( \sup_{x \in X_\lambda \setminus A} |f_0(x)| \right) + \sum_{\lambda \in \Lambda_2} \left( \sup_{x \in X_\lambda} |f_0(x)| \right) \\ &< \sum_{i=1}^n \frac{\delta}{2n} + \frac{\delta}{2} = \delta.\end{aligned}$$

更に

$$\begin{aligned}\varphi(g_\xi)(f) &= \sum_{\lambda \in \Lambda} \sum_{x \in X_\lambda} g_\xi(x) f(x) = \sum_{x \in A} g_\xi(x) f(x) = \sum_{x \in A} \xi(\chi_x) f(x) \\ &= \xi \left( \sum_{x \in A} f(x) \chi_x \right) = \xi(f)\end{aligned}$$

故に

$$\begin{aligned}|\varphi(g_\xi)(f_0) - \xi(f_0)| &\leq |\varphi(g_\xi)(f_0) - \varphi(g_\xi)(f)| + |\xi(f) - \xi(f_0)| \\ &< \frac{\varepsilon}{2} + \frac{\varepsilon}{2} = \varepsilon.\end{aligned}$$

$\varepsilon > 0$  は任意だったから, (i)(ii) により  $|\varphi(g_\xi)(f_0) - \xi(f_0)| = 0$ , 即ち  $\varphi(g_\xi)(f_0) = \xi(f_0)$  である.

$f_0 \in V$  は任意だったから  $\varphi(g_\xi) = \xi$  が分かる. 故に  $\varphi: W \rightarrow V^*$  は全射である. 以上より等長同型  $W \cong V^*$  が示された.  $\square$

## 参考文献

- [1] F. F. Bonsall, Sublinear Functionals and Ideals in Partially Ordered Vector Spaces, Proc. London Math. Soc. (1954), 402–418, <http://plms.oxfordjournals.org/content/s3-4/1.toc>
- [2] P. R. Andenaes, Hahn-Banach Extensions which are Maximal on a Given Cone, Math. Ann. 188, 90–96 (1970), <http://www.springerlink.com/content/v4rj31746u357841/>

- [3] J. L. Bell and D. H. Fremlin, A Geometric Form of the Axiom of Choice, *Fundamenta mathematicae*, 77(1973), 167–170, <http://matwbn.icm.edu.pl/tresc.php?wyd=1&tom=77>
- [4] J. Lembcke, Tow Extension Theorems Effectively Equivalent to the Axiom of Choice, *Bull. London Math. Soc.* 31 (1979), 285–288, <http://blms.oxfordjournals.org/content/11/3/285.full.pdf+html>
- [5] H. Rubin and J. Rubin, *Equivalents of the Axiom of Choice II*, North Holland, 1985.